
愛おしい約束

Izumo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛おしい約束

【Nコード】

N5817F

【作者名】

I z u m o

【あらすじ】

不可侵の島、神護島。そこは季節が冬なのにも関わらず、夏のような暑さを保っていた。その島に漂流した青年は、一人の少女に出会う。その後青年は、その島で過ごす内に、自分がこの島に流れついた理由を知る事となる……。たった三日間の楽しくも悲しい物語。

第1話：前触れ

私の暮らすこの小さな島で、私はずっと一人ぼっちだった。私には、お父さんもお母さんも友達も誰もいない。

その理由は二つある。

一つは、私の頭には角がある小悪魔のような小さく、黒い角が二つある。

これが原因で私は苛められた。

もう一つは、私には変な力がある。

時には枯れた植物を癒やし、時には人を傷つけてしまう。

だから私は、島の穢れとして村人から避けられる。

石を投げられる。

だから私はずっと森の奥で住んでいる。

そんなある日の事。

私の前に、一人の男の子が現れた。

その男の子は私に、普通に接してくれて友達のように遊んでくれた。

私が村人から避けられている事を知っているにも関わらず、だ。

それどころか、私の力を見て驚いてそして誉めてくれた。

それがとても嬉しかった。

そして、幸せだった。

だから私達は毎日のように遊んだ。

日が暮れるまで遊び続けた。

そしていつしか、その男の子は大切な人となっていた。

だけどその幸せは長くは続かない。

それは六月の暑い日、ひぐらしが活発に鳴いている頃。

突然、意味のわからない言葉を話す人達がこの島に現れた。

その人達は、花火の音が出る長い杖で次々と人を殺していった。

そして大切な人も私をかばって殺された。

私は酷く悲しんだ。

涙も、涸れるほど出し続けた。

響き渡る私の声。

悲しみと怒りのこもった声。

そして気づくと、後から来た、私から大切な人を奪った憎い人達は死んでいた。

でも、そんな事はどうでもよかった。

私は抱き寄せていた大切な人の亡骸を見る。

私の腕に掛かっている、彼からもらった紐で結んである腕輪の鈴はチリンツと音を鳴らす。

でも、彼の腕に同じように掛かっている腕輪の鈴は鳴らない。

私が軽く揺らすと、小さく鳴るが、それだけだ。

彼はもう動かない。

もう、私に微笑みかけてくれない。

そのたび、深い悲しみが湧き上がってくる。

そして思った。

こんな悲しみをもう誰にも味わって欲しくない。

だって、私はこの島の人達は嫌いじゃない。

だから守る。

守りたい。

そう願うと叶うような気がしたから。

そして私は眠りについた。

森の奥にある祠ほこりの中で。

島の人達を見守るために……………

暗く、大きく空を覆っている雲から、積もらない雪が降り続けている。

それは、この東京にとっては少し珍しい物だ。

今の季節は冬。そして町のあちこちには”さようなら二十一年、ようこそ二十五年”と書かれた垂れ幕が掛かっている。

その理由は、今日が十二月三十一日のため、町中の人々が年越しを待ち遠しくしているからだ。

そんな中、俺、宮沢 幸平は、とある居酒屋で友人を待っていた。グラスの酒が二杯目になったのと同じ、不意に後ろから肩を叩かれたため、振り向くとそこには一人の男が立っていた。

痩せた長身の身体に、居酒屋には合わない白衣を着た銀髪の男は、片手を上げたまま隣の席に座った。

「マスター、カクテル」

「ねーよっ」

俺はその男の頭にチョップを食らわす。

「イタッ！・・・相変わらずのツツコミだなあ」

「お前こそ、相変わら^{さいとう りょうた}ずのボケだな良太」

その男の名は齊藤 良太

幼い頃からの親友だ。

期間で言う^だと小学生から高校生まで。

「それで、まだ研究所設立は諦めてないのか？」

「当たり前だよ。せつかく大学を卒業したんだから、やれるところまでやらなきゃな。」

「・・・あ、そうそう急なんだが俺、結婚する事にしたわ」

何故か笑顔の良太に対して俺は苦笑。

「き、急すぎるにもほどがあるぞ・・・で、どうしてまた急に？」

「それがさ、大学でたまたま知り合ったんだけど、結構気があっちゃってねえ！んでもって、これがまた優しい人なんだよ」

「へえ……今度紹介しろよ」

言うと良太は俺を見下すように顔を傾け、ため息一つ。

「嫌だね、馬鹿が移る」

「俺は何かの病原体かよ……と言うより、親友に対しての態度が酷い上に、お前の方が事実馬鹿だろ」

言うと良太は首を傾げ、そうか？ととぼけた表情で言った。

「まあいいや。それよりも、やっと斉藤なんていう一般名から抜け出せるんだよお」

「……お前、全国の一般名の人に謝れ。最悪、土下座まではしろ」

「大丈夫だ。どうせ謝っても何故謝られたのかわからなければ、何の事かわかをなあゝいって言いながらクネクネしだすさ」
どこの民族だよ……

「……んで？その一般名から抜け出せるというほどの相手の名前は？」

そう聞くと、良太は不気味と思える笑みを作って親指を立てて、ぐつと突き出す。

「よくぞ聞いてくれた！俺の最愛の人は霧島 清美きりしま きよみって言うんだ！……どうだ、いい名前だろ？」

「あ、ああ、いい名前だな。それで、式はいつなんだ？」

「来年の五月だ」

思わずカウンターに、ゴンツ！と頭をぶつけてしまった。

ついでに顔を引き攣った……

「結婚は決まっているのになんで半年先なんだよっ！」

「今、共同でやっている研究が順調にいけば五月に終わるんだよ」

「……それで？清美さんも了承済みか？」

「もちろん！」

俺は、ならいいかと答えて、手元にあった酒を一口飲む。

「……そういえば、お前は何か予定はあるのか？ほら、野球の何とかっていう球団からスカウトきてたろ？」

その問いに、俺は吐息一つし、答える。

「その前に、プロ野球選手としての試験に受からねえとな。・・・
・まあ、その前に考えをまとめたいんだ。ちよっと一人旅でもしてみよ」

「そうか・・・ま、式までには戻ってこいよ？」

「当たり前だ。俺は何ヶ月行方をくまますんだよ」

良太は、それもそうだなと笑い出したため、俺もつられて笑い出す。

こんなに笑ったのは何年ぶりだろう、と考えながら。

その後、しばらくの間、昔話で馬鹿みたいに笑い合った。

酒が回って、その後の事は覚えていないが。

それから二日後。

年も明け、一月に入った頃だ。

俺は船の上にいた。

自分の気持ちを、考えを固めるために知り合いから船を借りて、大好きな海の上をのんびり航海中だ。

だが、しばらくすると、少しずつ雲行きが怪しくなってきた。

「・・・嵐がくるな・・・」

天気予報では晴れだったんだがな・・・

そう思い、引き返そうとした、その時。

「ッ！？」

突然のスクール。

それは風を纏っており、俺は船から投げ出されてしまった。

一瞬の事だったため気を取り乱したが、急いで船に戻ろうとする。だが、船はすぐに遠ざかり、俺は溺れるように沈んだ。

「約束だよ」

気を失う寸前、頭の中でそんな言葉が響いた気がする・・・

第2話：神護島

・・・・・・・・なんだ・・・？

何かが俺の身体を揺らしている。

そう思った瞬間、目が覚めた。

視界に入ったのは砂。

そして、俺の身体を揺らしていたのは波だった。

どうやら俺は、どこかの砂浜に打ち上げられたようだ。

その事に気付いたからか、感覚が戻り、身体も動くようになってきた。

ゆっくりと立ち上がった時、最初に感じた感覚は

「あ、暑い・・・・・・・・・・」

だが、その感覚はおかしかった。

なにせ今は、年が明けたばかりの一月、つまりは冬だ。

だが、俺の肌は夏の暑さを、鼻は夏の匂いを、耳は夏にしかない蝉の鳴き声をそれぞれ感じ取っていた。

中途半端な暑さからして六月の中旬くらいだろう。

顔を上げると、目の前には森が見える。

「・・・・・・・・とりあえず森に入るしかないか・・・・・・・・」

俺はそう呟きながら、額に流れる汗をぬぐって、震える脚を無理に動かしながら森の中へと歩き始める。

森の中は日陰のため意外と涼しいが、歩き続ける事によって結局暑い。

だが俺は、足にまわりつく草を邪魔に思いながらも、前へと進み

続ける。

すると突然、目の前に小さな人影が出てきた。
俺は驚き身構えるが、同じように相手驚いているようでその場に立ち尽くしている。

そして、よく見るとその人影は、白い長髪と真つ白な服を着た少女だった。

その少女は、濁りのない透き通ったような白い目で、俺をジッと見ていた。

身長は小さく、まだ七・八歳と思われる。

そんな彼女は驚いてはいるものの、怯えてはいないようだった。

そして、しばらくお互い目を合わせて立ち尽くしていると、急に少女は口を開いた。

「・・・貴方は島の外の人？」

その問いに、俺は正直に答えるべきか迷ったが、ややあつて頷く。
すると少女は幼く可愛さのある顔で笑顔を作り、俺に手を差し出してきた。

「ようこそ、私達の島^{かみこじま}”神護島”へ！」
神護島？

正直言つて、そんな島など知らない。

もちろんニュースでも、ましてや日本地図でも聞いた事も見た事もなかった。

だから俺は、目の前にいる少女に聞いてみる事にした。

「・・・なあ、聞きたい事があるんだが、ここは日本地図でいうとどのあたりなんだ？」

問いに少女は、差し出した手を下ろさずに小首を傾げた。

「日本、地図？・・・日本って何？」

返ってきた言葉に、俺は啞然としているしかなかった。

ほんの数秒の間に、異世界に来たのか？

俺は死んだのか？

はたまた、何かの特撮か？

などと考えてしまうほどだ。

そのため、頭が痛くなってきた気がした。

そして、なおも俺を不思議そうに見ている少女に笑顔を作る。

「今、聞いた事は忘れてくれ。それより、君の住んでいるところに君が案内してもらってもいいか？」

言って俺は、差し出された少女の手を取る。

すると彼女は嬉しそうに笑い、俺の手を引いた。

「当たり前だよ。だって、約束したもんねっ。」

それじゃ、案内するよ」

約束という言葉に疑問を持ったが、その事を問う前に少女は俺を引っ張ったため、結局問いかける事なく、俺自身が忘れる事となった。そうして歩き続けて蝉の鳴き声に慣れてきた頃、空を覆っていた木々が少しずつ開けて来たのに気づいた俺は次の瞬間、見たことのない光景を目にする。

そこには、先ほどまでの森とは打って変わって、無限とも言えるほどに広がった村があった。

上から見下ろす形で立っている俺の下では、木造建築の家や数多くの田畑。

そして、元気に走り回っている子ども達の姿が見える。

田畑では作業の全てが手作業で、トラクターなどの機械はどこを見ても無い。

正直言って、都会育ちである俺にとってこんな、失われたはずの光景を見るのは初めてだった。

とは言っても、子どもの頃には田舎に行った事はある。

だが今、目にしている光景は、今まで見てきた光景とは全く違う、そんな新鮮な感覚があった。

俺はそんな感覚を身に受けて立ち止まっていると、少女は俺の手を無理やり引いて、村へと降りて行った。

そして村に入ると、少女は俺の手を放し、くるりと回ってこちらを向いた。

「ここが私の住んでいる村だよ！どう？いい所？」

「い、いい所って聞かれても、まだ来たばかりだからわからないな・
・・・」

まあ、雰囲気はいい」

とりあえず、見たままの事を言っておく。

すると少女は、嬉しそうな笑顔になり、再度俺の手を引いてさらに奥くまで連れて行かれる事になった。

すっかり日も暮れたのにも関わらず、まだ鳴き続けている蝉の声を聞きながら俺は湯気の立つ風呂に入り、記憶の整理に入っていた。あの後、この村の村長の物と思われる、木造の少し立派な家に連れてこられた。

その時に知ったんだが、あの少女はその長の孫らしく、名を香坂かすか神楽だそうだ。

そして、彼女の頼みで、しばらくこの家に泊めてもらえる事となった。

何でも、島の外から人が来たのは何十年ぶりなんだそうだ。

まあ、何にせよ、泊まる場所が見つかってよかった。

「・・・・あの子にお礼、言っておかないとな」

そう言いながら風呂のお湯を手で掬い、顔に叩きつける。

右も左もわからないこの島。

だが、何故か落ち着いている俺。

この落ち着きは、どこから来ているんだろうか……
それさえもわからないまま、俺は風呂から出て、神楽と村長が待つ居間へと向かった。

座っている神楽の前、少し大きめのちゃぶ台の上には、ご飯とシヤケ、味噌汁に漬け物が置かれており、それが三人分あった。

「あ、こうちゃん！ご飯の準備、出来てるよ！」

「こうちゃんって……どうせ愛称的に言うんなら、せめてこーへいにしてくれ」

言うと神楽は頬を膨らませて、何やらブーブーと文句を言っていたが、俺が仕方なくちゃぶ台の前に置かれている座布団に座ると、すぐに機嫌を直して笑顔になった。

「ささ、食べて食べて！おばあちゃんの作った料理はすっごくおいしいから！」

「大げさにすると、お客様に期待させてしまうから、止めとこうねえ」

かすれ気味の声が出た方をみると、そこには初老の女性が少し腰を曲げて立っていた。

その女性はこの村の長であり、神楽の祖母でもあるそうだ。

名前は確か、喜美代きみよと言ったか。

「だって本当においしいじゃん！とにかく、食べてよっ」

「わかったわかった。それじゃ、いただきます」

言いながら両手を合わせて箸を手に取り、まずは漬け物を一切れ摘んで口を含む。

噛むとバリバリという、歯ごたえのある音が鳴り、漬け物独特の味が染み出してくる。

「……うまい」

これが田舎の、お袋の味ってやつかつと思いつながら、俺は夢中になつて他の物を含めて食べ始めた。

そんな俺を、神楽は嬉しそうに見ていた気がする。

食べ過ぎと思えるほどの飯を平らげ、膨らんだ腹を時々さすりながら、今は神楽に案内された小さな部屋で彼女と共に布団を敷いている。

とは言つても、神楽は俺が敷いた布団の上でゴロゴロと転がっているため

一人でやっているようなもんだが……

そんな事を思いながら、じとーとした目で神楽を見ると、その視線に気付いたのかどうかはわからないが、あつと声を出して俺を見た。

「明日、この島を案内してあげるねっ！」

「唐突だな」

「私は唐突に思いつく性格だからねっ。それじゃ、明日は楽しみにしててねー」

神楽はそう言い残して、両腕を広げて部屋を出て行った。

「……結局、何しに来たんだ？アイツ」

そう呟きながらも、ああいう性格のヤツには慣れてしまっているため気には止めなかった。

「はあ、疲れた……」

軽くため息をつく。

そして、大の字になって布団に倒れ込んだ。

眠くはない、が、身体を起こす気力はない。

ただただ、何も考えずにボーっとする。

時計の力チカチという音、セミの鳴き声、そして俺の心臓の音……

・その全てが俺の耳に入ってくる。

それから、どれくらいの時間が経っただろうか。

今の俺には五分とも一時間と言われても信じるだろう。

そう思い、不意にポケットに手を入れると、何か硬い物があるのがわかった。

そして、思い出す。

俺は携帯を絶対ポケットに入れる癖があり、ついでに言えば完全防水だった事に。

俺は何かに希望を持ち、急いで携帯を取り出して開いた。

「……ああ、そうきたか……」

見慣れた画面の左上にあるアイコンを見て、希望が絶望に変わった。バッテリーは満タンだが、アンテナは一本も立っておらず圏外の二文字。

これは、日本に戻る方法が無くなったという事だ。

「……まあ、いつか。居心地が悪いわけじゃねえから……」

この村は、いやこの島は、どこか懐かしい感じがするから。

「よし、寝るっ」

言ってから携帯を閉じてポケットに入れ、目蓋を閉じる。

すると意外にも、眠気はすぐに来た……

俺は森の中を走っている。

邪魔な葉や枝を両手でかき分けながら、ただ一つの場所へと向かって走っている。

「……………これは夢何だろうか。」

それとも、何かを思い出しているのだろうか。

だが、今の俺はそんな事を気にせず走り続ける。

すると突然、視界が開けた。

そこには草原が広がっており、奥には何かを祭っていると思われる小さな祠（ミヤ）のような物があり、俺は荒い息を無理矢理整わせて、その祠に近づく。

するとその祠の扉が開き、中から頭に角がある可愛い女の子が出て来た。

その子の顔には影がかかっており、されど満面の笑みだけは見え、俺を見ていた。

同じく俺も満面の笑みでその子を見た。

「約束通り来てくれたね……………」

そう聞こえた瞬間だ。

意識が覚醒し、目が覚める。

同時に、見慣れない天井が視界に入った。

どうやら、夢だったようだ。

頭の中から、光景が一秒残らず離れない夢。

「……………何なんだよ……………」

あれは、俺の記憶なんだろうか…………

そんな事を考えている自分の頬を叩き、起き上がる。

……………忘れよう。

そう決断し、居間へと向かった。

「　　こーへいー、早く早くー！」

「そんなに急がなくてもいいだろ」

神楽は白く長い髪を揺らしながら、元気よく走って俺を呼んでいた。そんな彼女を苦笑しながら見ていた俺は、周りの景色に目をやる。

今俺は、昨日神楽が言ってた村案内をもらっている最中だ。最初は村の中を一周し、次は村の子供達がよく遊んでいるらしい森へと向かっている。

・・・にしても、まるで前にテレビで見た、昔懐かし昭和の田舎に来たみたいだ。

聞くところによると、この村にはテレビなどの電化製品はなく、唯一あるのは冷蔵庫と電灯ぐらいだそうだ。

それがまた昭和っぽさを出している。

ちなみに、発電所は誰も見た事がないらしい。

というより、その名さえ、知ってる者はいないそうだ。

ますます、不思議な島だな・・・

だが、村の出口付近には田畑が広い面積に展開しているため、外界との交流がなくても充分暮らしていける感じだ。

などと思いつきながら歩いていると、突然神楽が俺の手を掴んだ。

「もう、亀みたいにくっくっ歩いてないで早く行こう！」

言いながら、神楽は強引に俺の手を引いて、早足で歩き出した。

その足取りは、昨日俺が通った森にある木々が開けた道へと向かっており、一歩進む事に蝉の鳴き声が少しずつ増えていた。

まるで、俺が森に入る事を拒んでいるかのように。

「……んなわけあるかつ」

とりあえず、自分にツツコミを入れておき
神楽に引かれるまま森の中へと入って行った。

まるで最初からあったかのように木々が開けている道を歩き続けている。

方向は、どうやら俺のいた浜ではなく途中で見た事のない道を進む形となった。

そして、しばらく歩いていると、木々が小縮している場所が目の前にあり神楽がそこを手で開くと、木々が全くない広場のような所に出た。

「着いたよ!」

神楽はそう言つて、広場へと向かい走り出す。

対する俺は、その光景に驚きながらも、神楽の後ろをついて行く。
辺りを見回すと、円を描くようにして草原が半径四十〜五十メートルくらいまで広がっており、入って来た場所から真っ直ぐ先、円の端には

小さな祠が建っていた。

夢で見たのと、同じ祠が……

「……あれは、夢だったのか……?」

そう呟きながら、俺はその祠に向かって足を動かす。

「みんな、早く早く紹介するね、あの人が　って、あれ?どうしたの?幸平」

後ろから俺を呼ぶ神楽の声がするが、今はこの祠が先だ。

一歩ずつ足を進める事に、祠に近付いていく。

そして、手の届く位置まで来た時、自然と手が祠の扉へと伸びてい

った。

その手を祠の真ん中あたりの枠に掘られている窪みに入れ、深呼吸を一つ。

「え！？あ、ちょっと待ってよ！！」

神楽の静止を無視し窪みに入れた手を思い切り引いた。

するとその中は、大人一人がギリギリ入りそうな空間の間場所に小さな石像が一つ、ポツンと置かれているだけだった。

内側の角には蜘蛛の巣が掛かっており、それから想像するに、ずっと掃除がされてないような感じだ。

殺風景で、色があるとしたらホコリなどの灰色だけだろう。

だが、この石像の目には別の色があり、俺をジッと見つめている感覚がしてくる。

その色は、祠内の灰色に負けないほどの真っ白な目で、何故か神楽を連想してしまう。

そういえば、神楽も同じ真っ白な目だったな……

「コラッ、ダメだよ開けちゃ！」

不意に隣から神楽に腕を掴まれ、無理矢理祠から引き離された。

そして彼女は祠の扉を閉めて、こちらを向く。

「この祠は昔、この島を守ってくれた人を祭っているんだから、不用意に開けちゃだめっ」

「守ってくれた人？」

言葉の中にあつた節を、オウム返しのように聞く。

すると神楽は、そだよつと言つて両腕をくの字に曲げて手を腰に添え、誇らしげに胸を前に出す。

「七十年くらい前、この島に来たたくさん外界の人達が、この島の人達を次々と殺したの。そんな時、ある女の子が不思議な力を使って、外界の人達を倒したんだよ」

七十年以上も前に、そんな事があつたのか……

「……それで、その女の子が神様のようになつたのか？」

問うと、神楽はうつむき頷いて、すぐに顔を上げた。

その表情は、苦笑。

「まあ、そうなんだけどね。その力を使った女の子は、命を引き換えにこの島を守る事にしたの。だからかな、祭られているのは・・・」

でもつと言った瞬間、神楽の表情は笑顔に変わった。

「その女の子が島を守ってくれたおかげで幸平に会えたから感謝、だねっ！」

「・・・そうかよ」

「うん、そうだよ！」

言って神楽は、小走りで彼女が呼んできたと思われる子供達の元へと向かった。

その後ろ姿を見ながら、俺は考えていた。

どれだけ深刻になっても、無駄なのかもしれない、と。

それなら、今を楽しんでおこう。

そう心に決め、俺は神楽達の元へと向かう。

すると神楽は、歩いてくる俺に気付いたのか、笑顔で手を振ってきた。

「幸平！外界の遊びを教えてよぉー」

神楽がそう言くと、周りの子供達もそれぞれに同意の声を上げた。

「・・・仕方ないな。」

「よし、お前ら。自分の身長半分くらいある棒と小さめのボールを持ってくるんだ。そしたら、また戻ってこい」

言つと、子供達は不思議そうな表情をしながらも、走って森の中へと消えて行った。

そしてしばらくすると、子供達は頼んだ通りの長さがある太めの枝と、小さなゴムボールを持ってきた。

「・・・上出来だな。」

「ねえねえ、これで何をするの？」

「早く教えて〜」

「ああ、わかったわかった。俺が教えるのは、野球っていうスポ

「ッだ」

「野球？」

子供の一人が首を傾げてオウム返しに聞いてきたという事はやっぱり野球は知らないか。

「野球ってのはな」

「」

空を見上げれば、朱色に染まっており、辺りの木々からは蝉の、特にヒグラシの鳴き声がしつこく聞こえてくる。

そんな事を気にしながら、一汗かいて濡れた服を手で引つ張ったりして風を起こし、少しでも涼しくしようとしていると、不意に隣を歩いていた神楽が笑いながら話しかけてきた。

「すつごく楽しかったね！驚いたよ、外の世界にあんな遊びがあるんだもんっ」

「まあ、暑いせいで汗がハンパないほど出たがな」

「いいじゃん、いいじゃん！寝る子は育つって言うしね」

まあ、確かにそうなんだがな……

……ん？

「関係ねえだろっ！？」

思わず驚きながら大声で言う神楽は、あはははと笑いながら早足で前に出て、くるりと回って俺を見た。

その表情は満面の笑みで、どこからどう見ても無邪気な女の子だ。

「で、何でこの遊びを選んだの？」

問われ、俺は少し迷った。

だが、答えるべき事なんだろうなっと思い、答えた。

「……俺の職業となるかもしれないスポーツだからだ。だが、今は迷っている……」

「迷う必要って、あるのかな？」

言った神楽に驚き、え？つという声を出して彼女に問い掛けた。

「何でそんな事が言えるんだ？」

「だって幸平、野球をやっている時はすごく楽しそうだったんだもん。それって、野球が大好きって事でしょ？だったら、やるべきだよ！」

言いながら神楽は両腕を大きく広げ、だつてつと前置きする。

「人の夢って、これでも収まらないくらいおっきいんだよ？その夢が野球で満たされるんなら、それほどまでに嬉しい事なんてないよ！」

その言葉に、俺は何も言えなかった。

ただ、吐息を漏らして苦笑した。

すると神楽はそれでわかったのか、先ほどよりも良い笑顔で俺を見た。

「今日はありがとね！楽しい思い出をつ！」

「あ、ああ」

俺は何故かその笑顔に見とれていたのか、曖昧な返事しか出来なかった。

だが神楽は、白く長い髪を揺らすようにして小首を傾け、されど笑みは絶やさずに笑いかけてきた。

そしてその表情に、愛おしさを感じる俺が居た。

だがその感情は、どこことなく俺のではない気もしてて……

蒸し暑い日が続いている中、俺は祠の女の子といつも遊んでいた。朝早くから、日が暮れるまで、ずっと。

特に決まった遊びじゃなかったけど、たった二人だったけどそれでも、とても楽しかった。

そんなある日だ。

女の子は俺に、約束して欲しい事とお願ひがあると言ってきた。その約束は

目が覚める。

視界に映ったのは、神楽の家にある一室の天井だ。

・・・また、妙な夢で目が覚めてしまった。

しかもまだ暗いため深夜に起きてしまったらしい。

「・・・眠気がない」

それに、喉が異常に渴く。

ついでに言えば、頭痛もする。

このままだと眠りにつけないと悟り、俺は立ち上がってこの家の裏手にあると聞いた井戸へと向かう事にした。

その途中の廊下で、ギシギシと五月蠅い床下の音を立てまいと忍び足で慎重に進んだ結果、井戸に着いた時は、緊張によって余計に目が覚めていた。

「・・・何やってんだろうな、俺」

などと呟きながらも井戸に近付き、バケツを落として水を掬い上げる。

そしてそのバケツを両手に持ち、中の水を一気飲みする。

地下水の冷たさが喉を一気に流れ、渴いていた事を忘れる早さで潤

った。

その事に満足しながらも、ふと視線を開いたままの裏口に向けた。そこから見えるのは玄関まで真っ直ぐに伸びた廊下だ。

その場所に、微かながら外へ出て行く人影が見えた。

身長の低い人影が。

俺はそれを見て、神楽ではないかと思いバケツを井戸の縁に置いて、神楽と思われる人影を追った。

わずかに見える神楽の後ろ姿を、速すぎず遅すぎず追いつけていると、行き先は森の中となっていた。

月明かりでさえも微かに、しかも開かれた道にしか照らされていない夜の森。

そんな中を俺は、ただ人影を追って歩き続ける。

と、その時だ。

不意に、人影が居なくなった。

そのため、走って居なくなった場所まで行くとそこは、今日の昼に教えてもらった祠のある広場のようなところに入る入口だった。

俺はその向こうへと何の躊躇もなく入って行く。

その先に広がった光景は一面の草原に月明かりが当たり、反射している

神秘的な光景だった。

そしてその奥にある祠の前には、やはり人影が立っていた。その人影には月明かりが射しており、白くて長い髪が光って見える。

髪型からして、間違いなく神楽だった。

彼女は祠の方を向いているため、当然ながら表情は見えない。

そのため俺は、彼女の元へゆっくりと近付いていく。

すると、彼女は俺に気付いたのか、こちらを振り向いた。

何となく見えるその表情はいつもとは違い、目は虚ろで細めており、白い瞳が妙な雰囲気^{かも}を醸し出している。

そして彼女は虚ろな目を微笑みにし、小さく手招きをしてきた。

俺はそれに従うかのように、歩み続けて彼女の目の前に立つ。

「……こんな時間に何やってるんだ？」

問いに、神楽は答えとは違う言葉を呟いた。

「……どうして……アナタは……姉様ばかり……」

その言葉に、え？と返したその時だ。

神楽が手を伸ばしたのと同じ、腹部に違和感を感じた。

冷たい固まりが無理矢理入り込んでくるような感覚。

そしてわずかな痛み。

それに気づいて腹部を見れば、神楽の手に持っている長細い包丁が俺の腹部に刺さっていた。

そして彼女は、無表情のまま涙を流している。

姉様のせいでアナタが……と呟き続けながら。

その状況に俺は混乱しながらも、腹部の傷から出る血のせいで意識が朦朧^{もろう}とし始めて五感が遠のき、その場で崩れ落ちるかのように倒れた。

第3話：神楽

ある暑い夏の朝。

僕はある祠に住んでいるという女の子に会ってみようと思った。

それは単純に、好奇心があつたからだ。

そのため、親が寝ているのを確認して、こっそりと家を抜け出した。そしてその足で、真っ直ぐに女の子の住んでいる森へと走り出す。

その走っている途中、僕は考えていた。

村の人はみんな、彼女を穢れの原因として見ている。

だから彼女は森の中で暮らしているそうだ。

でも僕は、好奇心だけじゃなく彼女が災厄の原因じゃない事を確かめたいから会おうとしているのかもしれない。

だから今、僕は必死に走っている。

と、その時だ。

道の途中に、木々が寄り添って通行を遮っているところに突き当たった。

だが僕は、何の躊躇いもなく草木を退ける。

その先に広がった光景は、丸い円を描いた草原が広がった場所だった。

そこには朝の日差しが差し込んでいて、草原に反射しているために何とも言えない神秘的な光景になっていた。

そして奥には祠があり、その前には白く、長い髪の人が立っていた。身長は僕と同じため十歳くらいだろうが、女の子はまだわからない。

そのため、僕は早足でその人の元へと向かった。

するとその人は、足音に気付いたのかこちらへと振り向いた。

同時に揺れた純白の巫女服を纏ったその姿は、確かに女の子だった。白い瞳で可愛らしい顔、そして頭には小さくて黒い角が二本。

たぶん、この角と白い瞳が原因で村の人は穢れと言っているのだ

ろうつと、僕は子供ながらそう思った。

でも、何だか仲良くなれそうな気がする。

そう思い更に近づくと、女の子は眉を寄せて、明らかに警戒心を持った表情で僕を見た。

そして、小さな口をゆつくりと開く。

「・・・キミは誰？何しにここまで来たの？」

問いは表情とは違い、冷静で透き通ったような声だ。

「・・・キミに、キミに会いに来たんだ。友達を探しているからね！」

「友達・・・？」

「そう、友達だよ。あ、僕の名前は嶋田^{しまだ} 幸平^{しんへい}、よろしくね！」

少し強引だったかなっと思いい、後悔した。

そして案の定、女の子は一度首を傾げた後、目を細めてジッと僕を見ていた。

「・・・苛めない？」

「いや、友達を苛めるわけないって」

「・・・神楽、香坂 神楽。それが私の名前だよ」

香坂 神楽、その名前は村長である香坂家の長女の名前だ。

「・・・やつぱり、村長の孫だとかは関係ないのか・・・」

それでも、僕だけはこの子の味方でありたいと、そう心に決めた。

だから僕は、彼女に手を伸ばす。

「・・・僕は、どんな事があってもキミの友達でいるよ。約束する」

自然と口から出た言葉に全てを任せる。

すると神楽は、僕の手にゆつくりと自分の手を伸ばしてきた。

そして、約束は交わされる。

小さな手で交わされた、小さな約束が。

いつの間にか日は落ちていて、辺りは暗くなっていた。

そのため神楽には、また明日っと言って約束し、急いで家へと帰った。

僕の家は香坂家だ。

理由は、ずいぶん前にお父さんとお母さんを亡くしたため、親戚関係にあった香坂家に引き取られたからだ。

その日の夜。

僕は神楽の妹である神流かんなに、神楽に会った事をこっそりと話した。

すると彼女は、驚いた表情をし、同時に小声で怒鳴った。

「どうして会ったの！？お婆ちゃんが会ったらダメだって言ってたじゃん！」

「会ってみたかった。そして味方に、友達になってあげたかった。そんな理由じゃダメかな？」

「・・・・・・・・・・」

呆れたのか啞然としているのか、黙り込んだ神流に僕は、これ以上何も言えなかった。

ただ、俯いた神流が何かを呟くまでは。

「・・・・・・・・どうして、姉様だけ・・・・・・・・」

「え？今、何て・・・・・・・・？」

よく聞こえなかったその言葉。

それを聞き直すために言葉を出せたが、神流は黙り込んだためにまた無言の時間が続いた。

神楽と出会って、二週間くらいが過ぎた。

そろそろ夏も本番だなあっと思いつながら、眠気を吹き飛ばすために大きく背を伸ばす。

僕は、神楽から今日が誕生日だと昨日聞いたため、徹夜でプレゼントは何かいいか考えていた。

そのため、寝不足だ。

でも、何がいいかはわかった。

僕は手の中にある二つの完成したプレゼントを見て、思わず笑みを零した。

それは、頼りないように見えて意外と頑丈な紐を結んで輪にした腕輪だ。

そしてその結び目を隠すように、小さな銀の鈴が一つずつ付いていて揺らすと、チリンツという可愛い音色を奏でた。

「……よし、完璧だ」

自分しか居ない自室でそう呟き、鈴を握り締める。

と、その時だ。

突然、大気を震わすほどの轟音が響いた。

その音は家を揺らし、開いていた窓から入り込んで僕の身体を震わす。

「い、今のは何だ!？」

外で何かあったんだと思うが、それが何かは検討がつかない。

だが一瞬、神楽の事が脳裏に浮かんた。

この轟音の中、彼女は一人ぼっちなのに側にいてあげられる人が居

ない。

「……僕が居てあげなきゃ！

そう決心し、立ち上がって部屋を出た。

その瞬間、再度轟音が響いた。

それにより、家がさつきより大きく揺れ僕はフラついて廊下で転んだ。

音は近い。

それだけは分かる。

でも、今の僕には関係ない。

一刻も早く神楽の元へと向かわなくちゃいけないから。

思い、両腕を軸にして立ち上がる。

すると目の前には、心配そうな表情で僕を見ている神流の姿があった。

「……どこに行くの？」

問いは、震えた声で掛けられる。

一瞬、返答に迷ったが、意外にもすぐに出た。

「……神楽の元へ、側に居てあげるために行くんだ」

冷静に答えた僕を見て、神流は目を見開き、驚いた。

そして、彼女の目からは、涙が滲み出す。

「どうして……どうして……どうして姉様ばかり……」

「

神流の目から流れる涙は大粒となり、次々と床に零れ落ちる。

「どうして私の事は見てくれないの！？私は姉様より長い間、幸平と一緒に過ごしているのに！」

神流の必死な声は、僕に向けられる。

でもそれでも、僕の思いは変わらない……

「……ごめん」

「……！ごめんじゃ済まないよ！わ、私は、こーへいと！こーへいと……一緒に……一緒に！」

肩が震えしゃくりあげるのを堪えながら、必死に訴えてくる神流。

僕はそんな彼女を見て胸を痛めつつも、彼女の願いを叶えてあげられそうにないなと内心で呟く。

だからこそ……

「神流、よく聞いて。僕は、ずっと一人だった神楽の側に居たいんだ。彼女の唯一の理解者になってあげたい。だから今、僕は彼女の元に向かいたい。例えば自分の命が危険な状態になっても」

言いながら、ゆっくりと神流に歩み寄り、満面の笑みを彼女に向ける。

「だから、ごめん。そして、ありがとう。僕の事を心配してくれて
そう言っと、神流は目を見開いて僕の目を見た。

そしてその目は少しずつ細くなっていき、彼女の顔がくしゃくしゃになっていく。

その目からは、さっきより多い涙が流れていた。

その時ふと、一つの事を思いつく。

「そうだ、この音が止んで、これ以上何も起きなかったら、三人で
――」

刹那、僕の声搔き消すような轟音が、今度は二回連続で響いた。それに驚き、そしてバランスを崩して転んだ。

神流も同じように転ぶ。

すると神流は、思い切り僕を睨み付けて叫んだ。

「早く姉様の元に行つて！このままじゃ、会えないまま終わっちゃうかもしれないから――！」

その言葉に強く頷き、神流が別れ際に見せた笑顔を目に焼き付け、走り出す。

愛おしい、神楽の元に……

時々聞こえる轟音でふらつきながらも、村の中を駆け抜ける。

所々に見える光景は、ボロボロになり燃えている家や、半円の形にへこんだ地面だ。

そして山の向こうからは、花火のような音が無数に聞こえる。

「・・・・一体、何が起きて・・・・」

一人そう呟き、走る足を速める。

邪魔な葉を退かしつつ、神楽がいる場所を目指して全力で走る。

そして、最後の枝を退かすと、いつもの広い草原に出た。

その奥の祠には、神楽の姿があった。

まるで俺が来るのを待っていたかのように、立っていた。

それを見た僕は、彼女の元へと走る。

そしてたどり着いた時、彼女は驚きつつも嬉しそうに微笑んでいた。

「・・・・来て、くれたんだね」

「うん、来たよ」

そう言うと、神楽は嬉しそうに笑い返してくれた。

「あ、そうだ。神楽に渡したい物があるんだ」

「え？渡したい物？」

オウム返しに問い掛けてきた神楽に答えるように、僕はポケットから鈴のついた腕輪を取り出す。

「こんな物しか作れなかったけど・・・・いいよね？」

言々と神楽は、嬉しそうに笑顔を僕に向けてくれた。

「もちろんいいよ！嬉しいなあ・・・・プレゼントなんて初めてだから！」

「ちなみに、僕もつけてるんだ」

言って自分の腕を挙げる。

そこには、神楽に渡したのと同じ腕輪が掛かっている。

「やった！お揃いだあ！！」

それを見た神楽は、さっきよりも嬉しそうな表情を見せてくれた。と、その時。

後ろの方、この草原の入口で草を掻き分ける音が聞こえた。

振り向くとそこには、鉄の帽子を被って緑色の服を着込んだ男が立っていた。

その男は、木で出来た杖のような物を構えており、それは真っ直ぐに僕達を狙っていた。

その瞬間、僕は自然と両手を広げた。

刹那、花火のような音と共に、腹痛が起きる。

まるであの杖から何かが出たように。

「……こう、へい？」

後ろからは、神楽の声。

そして正面の男は、驚いた表情と共に知らない言葉を発していた。

「……?!」

男はそう言い残し、慌てて来た道を引き返して行った。

そしてその場に残ったのは、呆然としていると思われる神楽と、腹痛に耐えられずに倒れ込むとする僕の二人だけだ。

だけど、地面に倒れると思っていた僕の身体は、神楽がとつさに受け止め、されど支えきれずにゆっくりと地面に落ちる。

そして神楽は、僕を半起こしにする。

そこから見える自分の腹部には、服を通して赤い血が滲み出していた。

腹部を押さえていた手も同じく、赤かった。

「こーへい!? 大丈夫!？」

見上げれば、心配そうな表情をして涙ぐんでいる神楽の顔が吐息のかかるほどの位置にあった。

「……だ、大丈夫だ……よ……」

腹に上手く力が入らないため途切れる言葉をなんとか伝えるが、神楽の瞳から流れ始めた涙は止まらない。

「ダメだよ、声を出しちゃ! 待ってね、今治すから!」

言って神楽が僕の腹部に手をかざすと、小さな光が彼女の手と僕の腹部の間に宿った。

それでも血は止まる事なく、一向に流れ続けている。

「・・・それは前にみせてくれた・・・ふしぎな力だね・・・でも、もうむりだよ・・・」

「無理じゃないよ！絶対に、絶対に助けるから！！」

「・・・一つ、約束をして・・・そして神楽は、その約束を破らないように・・・生きるんだ・・・」

所々で咳き込みながらも、伝えたい事を言わなくちゃいけない。

「・・・まるで、別れの言葉みたいだな・・・」

「ダメ！ダメ！！そんなお別れのような事言わないで！！」

神楽が一言発する度に涙を流す瞳。

その目元にそつと血の付いていない左手を添え、ぬぐい取る。

「・・・ずっと、笑っていて・・・いつものように、元気な笑顔で・・・」

自分はもう、笑顔を向けられないのに、身勝手だなあ・・・

「・・・いやだよ、こーへいがいなくちゃ笑えるわけないじゃん！こーへいが居なくなったら、私はまた一人ぼっち・・・」

「大丈夫・・・いつも、そばにいるから・・・神楽を見守っているから・・・」

あれ？目が・・・霞んできた・・・

最後まで神楽の顔を見ていたかったのにな・・・

「こーへい！？そ、それじゃあ私からも約束して欲しい事があるの！絶対に、いつかまた会おうね！？必ず、必ずだよ！？そしたらずつと一緒に居ようね！？」

約束する。

その言葉は出せなかった、出なかった。

でも、出したかった。

そのまま、意識が遠のいていく。

さすがに聞こえる神楽の声も、その度に揺れる腕の鈴の音も次第に聞こえなくなっていく・・・

そして全てが、閉ざされていく・・・

伝えきれなかった言葉は、次の僕に託そうー

意識が一気に覚醒する。

そして、力一杯起き上がった時、俺は神楽の家、昨日借りた一室に居た。

さっきまでのアレは夢だったようだが、今でも鮮明に覚えている。

「……不思議な感じた。

まるで、誰かの記憶を、思いを託されたかのような。

嶋田 幸平という、俺と同じ幸平の名を持つ少年の、神楽に伝えたかった思いを。

「……よし、やるか」

自分にやる気を出させるためにそう呟き立ち上がって部屋を出る。

神楽を探すために家中を探したが、神楽どころか村長の姿も見えない。

そのため、家の外に出てみるが、誰一人居なかった。

ちなみに、家を出る際に時計を見て来たが、時刻は午後十三時。

つまりは、村人の一人は外に出ていてもおかしくないのだ。

だがその静けさは、元よりあった気がして……

「……神楽は……あの場所、か」

呟き、真っ直ぐに森を目指して走り出す。

やっぱり居た、と呟いた俺が居た。

いつもの草原の奥にある祠の前には、一人の少女が立っている。

その姿は嶋田 幸平が初めて会った時と同じ巫女服だ。

白を強調したその服は、されどいつの間にか空に掛かった雲によって、あの時の神秘さは出していない。

時たま吹く風で長い髪を揺らしている彼女は、俺が近くに寄るのを待っているかのようにピクリとも動かない。

だから俺は、それに答えるように近付く。

そして、距離が縮まった時、彼女は細目から涙を流した。

それを見た時、彼女は神楽じゃないとわかった。

彼女は……

「……神流、だな？」

問いに、神流は驚いた表情をし、すぐに俺を睨み付けた。

「……何で、私を神楽と呼ばないの？ 幸平は、姉様しか見てないのに……！」

言いながら流れているのは、あの時と同じ涙なのだろうか。

思いながら俺は、無言で神流に近付く。

そして、彼女を抱き寄せた。

「……！」

「……俺は、神流も見ていた。だから、最後に言えなかった言葉は今、言う」

思い出す。

あの時の嶋田 幸平が言おうとしていた言葉を。

そして、俺なりに直して。

「音は止んだ。これでまたいつも通りだ。……だから、今度
は三人で遊ぼう。俺と神楽と神流、この三人でだ」

その言葉に神流は、俺の胸元に顔を押し付けて、何回も頷いた。そのため、俺は彼女の頭を優しく撫でる。

「……………ありがとう」

「ああ……………」

たった一言の会話の後、神流は眠った。

ゆつくりと、身体から力が無くなっていき、俺に寄りかかる。

そんな彼女を俺は、起こさないように草原の上に座り、起きるまで彼女に膝枕をしてあげる事にした。

空に掛かっていた雲が無くなり、日が射し込む。

その光は、草原に反射し、いつもの綺麗な光景を見せてくれた。すると、俺の膝の上に頭を置いて寝ていた神楽が目を覚ました。

「……………こーへい？」

小さな声で問い掛けてきた神楽に、笑顔を向け答える。

「ああ、俺だよ」

吐息を一つし、

「また会おうねって、そして会ったらずっと一緒に居ようって約束を思い出したからな。急いで来た」

言つと神楽は驚き、次の瞬間には満面の笑みを作った。

「そっか、思い出してくれたんだ……………神流は？」

「眠ったよ。幸せそうにな」

それを聞き、神楽は安堵したように吐息を一つした。

「・・・・・・・・全部ね、全部夢だったんだよ・・・・・・・・さっきまでのこの島は」

夢。

それはたぶん、村人が一人も居ない理由なのだろう。

「・・・・・・・・お前の夢だったのか？」

問いに神楽は頷き、俺の目を真っ直ぐ見た。

「私が、こーへいとまた一緒に居たかったから、昔村の人達が穢れつつ言っていた力を使った」

でもつと言った神楽の表情は雲り出した。

「そのせいでこーへいが大怪我しちゃった・・・・・・・・だから、もう終わりにしなきゃ・・・・・・・・」

「そんなの、気にす　っ！？お前っ！」

神楽の異変に気付いてそれを知った時、驚いた。

彼女が片手で押さえている腹部は服を通して赤く染まっていたのだ。

「あはは、あの時と・・・・・・・・逆だね・・・・・・・・」

「この傷はいつ出来たんだ！？」

「神流がこーへいにさせた傷を、私が受け取ったんだ・・・・・・・・だって、ここは私の夢の中だからね・・・・・・・・簡単だったよ・・・・・・・・」
言ってる間にも、神楽の息は荒くなっていき、腹部の血は服を赤く染め続けていた。

「この夢の中じゃあ幸平に迷惑ばかりかけちゃったから・・・・・・・・ね」

「馬鹿か、迷惑なんて一つも思っていない！逆に、お前のおかげで決心がついた事があつたんだから、感謝しているんだ！」

感情を込めて、力強く訴え掛ける。

すると神楽は目を弓のようにして笑顔になった。

「よかった・・・・・・・・それじゃあもう、未練っていう物は残らないね・・・・・・・・」

「ま、待て、死ぬな！約束しただろ！？ずっと一緒に居るって！」

「大丈夫・・・・・・・・私はずっと側にいるから、見てるから・・・・・・・・」

心配しないで……」

あ、でもつと言って言葉を続ける。

「最後に一つあるから、耳を近付けて……」

その頼みに俺は頷き神楽の口元に耳を近付ける。

すると突然、頬に柔らかな感触。

驚きながらも視線を移すと、神楽の唇が頬に当たっていた。

その後、神楽は顔を話して照れくさそうに、えへへと笑った。

「隙あり、だね……」

「ば、馬鹿かって……」

神楽の笑みに答えるように、俺も笑みを作る。

たぶん、彼女から見れば、不器用な笑みになっているだろう。

「あ、あれ？目が霞んできた……本当、あの時のこーへいみたい……私もう、死ぬんだね……」

「お、おい……死ぬな、死ぬなよ！？まだお前は生きているべきなんだから！神楽！」

「これから……本当の夢を見続ける事になるんだね……」

「

ゆつくりと、神楽の息は弱々しくなっていく。

「お休み……幸平……」

「神楽！……かぐ……ら……？神楽？」

目を瞑った神楽を見て、俺は何度も身体を揺すった。

だが彼女は目を開けない。

一言も話さない。

「神楽！？神楽！！起きろ神楽！！神楽あああ！！！」

森中に響き渡る俺の声。

目からは涙があふれ、喉からはかれるほどの大声が出続ける。

対する神楽は、事切れたかのように腹部を押さえていた手を地面に落とし、眠っているような微笑ましい表情を俺に向けている。

それを見てもなお、俺は声を出し続けた。

全てが涸れるまで……

目が覚める。

気がつくと俺は、居酒屋のカウンターに突っ伏して寝ていたようだ。
「……………寝ていたのか……………」

そう呟きながら、目の前にあるコースターの上に置かれたグラスを手にとつて酒を口に流し込む。

入っていた氷はすでに溶けており、ぬるくなっていた。

酒を飲み干した後、ため息をつき、虚空を見た。

「……………またあの夢……………」

思えばあれから、五ヶ月が過ぎた。

俺は全てがかれはてした後、決心をつけて神楽の亡骸を祠の近くに埋め、海を渡る手段を探しに海岸沿いを歩き続けていた。

そしてしばらくすると、俺が乗っていた船が漂着していたのだ。

そのため、すぐに海へと押し戻して日本に帰る事にした。

その後、すぐさま図書館に行き、神護島について調べた。

神護島。

それは、見えはするが、近寄ろうとしても一向に近寄れず、誰も上陸する事ができず、まるで神に護られているような島のため、神護島と名付けられたそうだ。

だが、地図には載せていないため、場所を知っている者は自然と減っていった。

そんな中、神護に関連した項目が一つだけあった。

それは一九四五年、第二次世界大戦中の事だ。

アメリカ軍の軍艦数隻が日本に向けて進行中、地図に無い島が見えるという通信があった後、行方不明になった、との事だ。

これはたぶん、嶋田 幸平の記憶にあつた銃を持ったヤツらの事を示しているのだろう。

つまりは、あの夢の世界は、嶋田 幸平の記憶は約七十年前の出来事だったと言う事だ。

だが、それから現在に至っても、度々目撃情報は密かにあるらしい。ちなみに、何があつたのかは、嶋田 幸平の記憶であつてもわからないままだ。

・・・まあ、不思議な体験をしたのには変わりがない、か。

それに、後悔も少し残っている・・・

そして、俺はあの体験を、嶋田 幸平の記憶を含めた物語として本にしようと思い、そして今は原稿を書き終えたため、一息つけるために居酒屋で酒を飲んでると、そんな所だ。

タイトルは・・・まだ決めていない。

何にすればいいか迷っている。

と、その時だ。

目の前に置かれていた空のグラスに酒が突然注がれた。

見ると初老の店主がにこやかな笑みを俺に向けながら、傾けていたさけびんの口をフタで閉じた。

「はいよ、未来の有名人に俺からの奢りだ」

「有名人って・・・まだプロになれるかもわからないってのに悪いよ」

苦笑しながら言う俺に向かって店主は、ガハハハッと豪快に笑った。

「スカウト来てたほどの男なんだ、プロ野球の試験なんて簡単に通るさ！

もうすぐ合格の知らせが来て、六月が永遠と思えるほどの練習がお前さんを待っているんだようー！」

「それはそれで嫌だな・・・」

はははつと乾いた笑い声を出しながら、店主の言葉を頭の中でリピートする。

「……………決まった。」

「決まったあ！！」

叫びながら俺は、思い切り立ち上がった。

「な、何だ！？もう合格が決まったのか！？」

驚きながらも問い掛けてくる店主を無視して、俺は椅子の横に置いてあるバッグから原稿用紙を取り出す。

その時、バッグにつけられている鈴がチリンツと鳴った。

それを聞いて、ふと手を止める。

視線の先にあるのは、あの後祠の中で見つけた、プレゼントの鈴だ。持ってきてよかったのか、と迷いはしたが、神楽と神流が近くに居る気がしたため、俺の生き様を見せるために持ってきた。

理由が不器用だなつと、今更ながらに思い、動きを再開する。

取り出した原稿をカウンターのの上に置き、ボールペンをポケットから出してタイトルを書き込む。

永遠の六月、と。

あの六月のような暑さの島で永遠のようにに続いた物語を思い浮かべながら、ネーミングセンスの無い俺が考えた、タイトルだ。

それを書いた瞬間、頭の中にある光景が思い浮かんだ。

神楽と神流が俺を中心にして笑顔を向けている光景を。

第3話：神楽（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます！

ども、作者のIzumоです

今回の作品は、二作同時連載をしてしる中で、無茶をして書いていた物で

いつもの空の五話あたりの後書きで書くと言っていた物です。

とは言っても、1話目で霧島家の両親の名前がわかるだけでそれ以外は完全に独立しているんですけどね（笑）

と、まあ制作秘話みたいな感じでお話させていただきました。

それでは、これからも二作同時連載と短めの他作を書くのを続けていきますので、どうか暖かく見守っていただければ幸いです。

では、長々と失礼しました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5817f/>

愛おしい約束

2010年10月20日19時33分発行